



(草津)

今回の調査地の東に隣接しており、一九九三年から始まった草津市教育委員会による区画整理事業に伴う発

掘調査で、古墳時代から中世にかけての複合遺跡であることが判明している。その中でも奈良時代～平安時代にかけての、北で東に八度振れるほぼ東西南北に走る正方位地割に則って計画的に配置された掘立柱建物群一三〇棟以上、井戸跡一〇基、区画溝などの溝跡四〇条以上の遺構が注目されている。また、遺物も硯、木沓、木簡

調査は、現況の草津川を付け替える草津川放水路建設に関連する伯母川改修工事に伴うものである。

大將軍遺跡は、草津市南部に位置し、湖南アルプス(金勝山)から延びる標高一〇〇～一〇六mの丘陵部最先端にある。

- 1 所在地 滋賀県草津市追分町
- 2 調査期間 一九九六年(平8)四月～六月
- 3 発掘機関 滋賀県教育委員会・(財)滋賀県文化財保護協会
- 4 調査担当者 仲川 靖
- 5 遺跡の種類 官衙跡・河道跡
- 6 遺跡の年代 奈良時代～平安時代
- 7 遺跡及び木簡出土遺構の概要

滋賀・大將軍遺跡

掘調査で、古墳時代から中世にかけての複合遺跡であることが判明している。その中でも奈良時代～平安時代にかけての、北で東に八度振れるほぼ東西南北に走る正方位地割に則って計画的に配置された掘立柱建物群一三〇棟以上、井戸跡一〇基、区画溝などの溝跡四〇条以上の遺構が注目されている。また、遺物も硯、木沓、木簡(本誌未報告)、「郷長」や「五」と書かれた墨書土器などが出土しており、官衙的な要素をもつ建物群と考えられている。

今回の調査地は、この建物群内の北西端にあたり、建物群の北側に流れる自然流路の続きである。この自然流路は、最深部で深さ四m以上あり、その後三回の乾期、増水期、土石流堆積期が繰り返されて埋没した状況が窺われた。

遺物は、二回目の乾期から三回目の乾期にかけての増水期、土石流堆積期に堆積した砂礫層から出土した。古墳時代から平安時代の土器類が大量に出土しており、中でも奈良時代から平安時代にかけての土師器、緑釉陶器、灰釉陶器が圧倒的な量を占める。木簡は河道内の溜り状の箇所から一括して出土した。木簡の他、物差し・曲物・斎串・舟形代などが出土している。

木簡は計四点で、自然流路内の黒灰色砂質土層から、曲物二点、物差し一点、斎串三点とともにまとまって出土した。

8 木簡の釈文・内容

(1) 1 : 4
(2) (3) 1 : 2

(2)

(1)

(1)は 転用材を用いたものか。上端に鉄条網状の刺突圧痕が認められ、何かを縛ったようである。(2)は上部が焼損。(3)は、下部が欠損する。(4)は、短冊状の板の両面に墨書が明瞭に残る木簡で、中央部より下の両側面が欠損する。表とみられる面は、上部四行書き、下部五分の三を二行書きとする。裏面は上端のみ三行書き、以下は二行書きである。表の二行書きの部分から書き始め、裏面の二行書きを書いてから、表面に戻って上部四行を付け加え、最後に裏面の上部三行を書いたとみられる。漢字まじりの仮名書きで、書状と考

[illegible]

〔次力〕〔卅力〕
 〔 〕若善〔 〕物〔 〕人〔 〕
 (140) × 18 × 4 081

[illegible]

252×40×3 019



(4)



(4)



えられるが、意味は判然としない。
 共伴する土器は、一〇世紀から一
 一世紀のものと幅が広く、木簡の
 時期を限定するまでには至らない。
 木簡の釈読については、奈良国
 立文化財研究所の綾村宏・館野和
 己氏、大阪大学の東野治之氏、京
 都国立博物館の湯山賢一氏のご教
 示を得た。

(仲川 靖)